

ダビデ王物語講解説教 サムエル記上18章1-30節  
『愛と憎しみ』

人は人を愛するというところにいつもひらかれている存在ですが、同時に、人は人を憎むということにもいつもひらかれている存在です。それはとても不思議です。どうして人は人を憎むのか。憎しみというものを持つのか、不思議です。

愛することと憎しみとは、いいことと悪いこと、というような単純化することができない。愛する、ということの反対が憎しみ、というわけでは必ずしもないからです。愛したがゆえに憎しみを覚えた、ということとはしばしば経験することです。愛したがゆえに、相手が自分の望むようにならなかった時に憎しみを覚える、ということは普通にあることです。「可愛さ余って憎さ百倍」、ということわざがあります。そのままです。英語のことわざでも「最大の憎しみは最大の愛から生まれる」という言葉があり、愛と憎しみはたんに反対のものではなく、しばしば表裏一体、縊（よ）り合された縄のようなものでもあるのです。

ダビデがゴリアトに打ち勝ち、ペリシテ人が撤退し、イスラエルが膠着した戦いに勝利を収めると、国中の人々がサウル王の凱旋を出迎えました。女たちは楽を奏でこう歌い交わしました。「サウルは千を討ち、ダビデは万を討った」それを聞いたサウルは激怒し、悔しがった。(不機嫌になった。)若く、勇敢で、美しく、国中の人々の称賛を集めたダビデを見て、サウルの心は激しく揺れたのです。それ以来、サウルはダビデを妬みの目で見えるようになった、というのです。だがそれとともに、神からの悪霊が激しく下り、サウルをものにとりつかれた状態、狂気へと陥れました。

けれどもそのサウルを豎琴で慰めるのもまたダビデでした。もちろんそれはサウル自身が望んだことなのでしょうが、自分で自分を追い込んでいくような濃い関係です。サウルは槍を手にして、突き刺そうと瞬間思い、振りかざしたのです。サウルはもうすでに紙一重のところでした。ダビデはサウルによって戦士の長に任じられ、戦果を挙げ、どの戦いにおいても勝利をおさめ、人々からの評価を高いものにしていきました。国中のすべてものがダビデを愛した、というのです。戦いの先頭に立って戦うダビデ、勝利の凱旋の先頭に立つダビデ、まさにダビデはイスラエルのヒーローでした。ダビデにとって、す

べてがよい循環で動いていきます。サウルは感情の振り子の激しい動きにさいなまれていたのではないか。サウルは一つの提案をダビデにします。長女メラブをダビデの妻として与えるというのです。そして軍隊の責任を与え、ペリシテによって戦死させる、というシナリオをサウルは描く。だがダビデはこの王からの提案を自分など何者でしょうと言って退ける。ダビデはこの時もまだ、自分が将来イスラエルの王になるとは夢にも思っていなかったのでしょうか。しかもいざその段になると、なぜかサウルは心変わりして、娘を別の男のところに嫁がせてしまう。一方サウルの二番目の娘、ミカルはダビデのことが好きで、ダビデを愛していた。サウルにそのことを告げる者があり、サウルはそれを好都合と捉え、二番目の娘をダビデの妻として与え、その上でペリシテとの戦いで戦死させようとするのです。娘の気持ちなど視野の中に入っていない。すべてが自分の思い、自分の計画。サウルは家臣を通して、ダビデにその話を伝える。しかし、ダビデは、自分は貧しい家の者なのだから、とても結納金を治めることができない、と言って断ろうとするのです。ところが家臣は「王は結納金など望んでいない。王の望みは敵のペリシテ人の陽皮百枚だ」と言うのです。ダビデは王の望みをかなえて、王家の婿になることも示される道かと思い、自分の兵を従え、ペリシテ人を討ち取り陽皮200枚を持ち帰る。サウルはダビデの戦死を期待したけれど、むしろますますダビデの評価は高まり、サウルはミカルをダビデの妻として与えることになるのです。もちろん自分で言いたした話です。だがサウルのシナリオはすべて裏目に出る。ダビデの戦いにおける連戦連勝はいやがうえにも、ダビデが神の守り支えと導きの中にあることをサウルに感じさせた。そして娘ミカルのダビデへの愛情も、肌で感じていたでしょう。そしてもう一つ、18章の冒頭にある、サウルの息子ヨナタンまでもが、ダビデへの深い友情、友愛を持っていたのです。ダビデは今や国中の人々の期待と肯定のまなざしの中にあり、そして王宮の中でも評価は高まり、サウルの家族にまで深く愛されていたのです。サウルはダビデのことをもともと気に入っていたのです。そしてそれは今もある意味変わらない。ダビデのことを重んじている。だが、今、サウルはダビデのことを恐れている。どうしようもない敵意を抱いているのです。そしてサウルはそのことで、深い孤立感を味わっていたに違いありません。

サウルはダビデに強く嫉妬した。妬んだのです。あの巨人ゴリアトを倒した、イスラエルを勝利へと導いた、そこに人々の称賛が集まる。しかしサウルの中に抑えがたい妬みが出てくる。サウルは王だったのです。王よりも称賛されるものがあること自体、許せない。戦いはサウルが勝利へと導くのであって、ダ

ビデであってはならないのです。創世記の最初に出てくる兄弟、カインとアベルの物語で、兄カインの献げものに神は目を留めなかったが、弟アベルの献げものには目を留めたとき、カインは激怒したのです。妬みですよ。神が同じように扱わなければならない、などと誰も決めたわけではない。神の自由です。しかしカインは弟アベルに神が目を留めたことを許せなかった。妬みが怒りになり、しかもその怒りの対象を目を留めた神ではなく弟に定めて、殺してしまおう。殺人へと至る。

サウルのダビデに対する妬みも怒りにつながり、殺人へと向かう。その怒りの対象は本当はダビデを恵み祝福する神へのものであるのかもしれないのに、カインと同じように、神ではなく、ダビデを怒りの対象とする。そこに二人に共通する根本的な問題があるのかもしれない。

サウルは自分の中の妬みに振り回されていきます。ものに取りつかれた状態になる、とはそのことを言っているのです。狂い喚いたと訳している聖書もあります。自分の妬みや怒りに自分が縛られていくのです。自分の娘の婿にして、戦場に送り、戦死させようとして結果的には裏目に出る。そのことで自分自身いよいよ妬み怒りを増すことになる。「サウルは生涯、ダビデに対して敵意を抱いた」というのですが、つまりその妬みや怒りから自由になることはなかった、ということです。文字通りサウルは生涯自分の中の妬みや嫉み、怒りに振り回されるのです。

この後サムエル記で続くサウルの執拗なダビデを殺害しようとする物語は、狂気に苛まれた救いようのないドラマだ、という人がいます。確かに救いようがない。救いようのない人間が聖書には描かれているということです。救いようのない人間だからこそ、神にすがらなくてはならないのではないかな。本当に自分では自分を救えない、ということにサウルは気づかなければならないのです。どこかで、自分で何とかする、という気持ちがある限り、本当には神にすがらないのではないかな。

サウルはダビデへの妬みや怒りを抱え込む前に、いや抱え込んでからでも遅くないと思うのですが、神さまに自分の正直な気持ちや思いをぶつけるべきだったのではないかな。サウルは神から王としての退位を伝えられて後、それに聞かず、それを無視し、王位を手放すことなくしがみついていた。そこから彼は、神に祈らなくなったのではないかな。もちろん一国の王として宗教儀式としての祈りは献げていたでしょう。だが、誰もいない、自分だけの場で、神さまと差し向かいの状態、祈って向き合うことを避けてきたのではないかな。向き合え

ば、サウルなぜおまえは王位を退かないのか、とズバリ言われることが怖くて、避けてきたのではないか。

一方でダビデは神の導きと支えを受けて順風満帆のようにサウルの目には映る。神さま、なぜわたしではだめで、ダビデならいいのですか、と問い始めるべきだった。問うて、そこで自分に対する神の言葉を聞く、ということがどうしても必要だったのではないか。もちろん、サウルはそこで神からの裁きの言葉や、断罪の言葉を聞くことになったかもしれない。そうなったでしょう。だが、その上で、サウルは王としてではなく、人として神の信実の中にある自分を受け取ることになったであります。カインも、サウルも最も大事なことを避けてしまった。

ものにとりつかれた状態に陥れたのは、神からの悪霊だった、と10節にはあります。どう読んだらいいのか、と思いますが、妬みにとりつかれ、怒りに振り回され、救いようのない状態をさまよう、その人間の姿にサウルが気づき、神のもとへ立ち帰らせようとする神の働きなのではないか、と想像します。10節の神の意図は、わたしたちにわかることかどうかもわからない。ただ、神は、救いようのないサウルに働きかけておられたことは間違いない。悪霊だろうが何だろうが、神がサウルに働きかけておられることはまちがいが無い。イエス・キリストがわたしたちに表してくださった神の栄光とは、十字架においてご自分を投げ出し、いのちを献げてわたしたちの罪を贖い、そしてゆるし、復活による新しいいのちを与える、という愛です。キリストが示されたアガペーといのち、それこそが神の栄光、神が神であり続けてくださることの中身です。サウルはこの神の栄光の中にあるのです。サウルも神のアガペーの中にあり、いのちの中にある。サウルは自分や自分から見た周囲にばかり気を取られている。自分の物語にばかり気を取られている。神の恵みの物語の中にいる自分を忘れていた。だがそれに気づかなくは。サウルもわたしもどこかでつながっている、と思うと、神の働きの中にある自分に気づくことがどれほど切実なことか、そこに帰る以外にはない、ということを感じさせられるのです。